
Empty Memory

長月 六花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Empty Memory

【Nコード】

N4545Z

【作者名】

長月 六花

【あらすじ】

朝目を覚ますと、ネコの耳を頭にくつつけた少女が目の前に。

「アリヤ、アリヤに会いに来たの。一緒に帰ろう?」「……人違いだろ。俺はアリヤじゃなくて悠」

異世界から来たネコの少女と、元魔女・現普通な少年の11日間のお話。

00・Prologue

チリン、と。

猫の首輪についている鈴が鳴った。

「どうしたの？」

暁の魔女が、傍らにいる黒猫に聞いた。

黒猫は血のように紅い瞳を魔女に向ける。

猫の瞳は何を伝えようとしているのかは分からない。

だが魔女には意味が解るようで、真っ黒な毛並みの猫の背を撫でながら口を開いた。

「そんなにお前の主人に会いたいなの？」

猫は今度こそニャーと鳴いて、意思の強さを魔女に伝える。

魔女は少し眉を寄せた。

「主人がどうなっているのかは知っているでしょう？それでも主人の元へ行きたいの？」

黒猫にとっては酷な言葉だった。

だが、魔女はこの黒猫がとても大切に、必要以上に傷ついて欲しくなかった。

こんな言葉で傷つくようなら、この黒猫の主人の元へは送れない。送ったりしたら、あまりにも酷い現実に関が折れてしまう。

魔女が発する言葉は、ある意味で黒猫への優しさだった。

「もうアナタの知っている主人では無い。主人はアナタの事なんて

少しも覚えてないかもしれない。それでも行きたいの？」

猫は一瞬きする間だけ耳を垂らさせたが、すぐに魔女を見据え、耳を立てた。

紅い瞳からは意思の強さが伺えた。

魔女はその瞳を見て、柔らかに微笑んだ。

「これを身に付けていなさい。」

魔女は、猫の左耳に耳飾りを付けた。

既に左の耳には違う耳飾りを付けていたが、魔女は構わずにその上に付けた。耳飾りは細長い形の綺麗な青色の宝石が付いている。

「まじないのような物だから。」

黒猫はお礼を言うかのように一声鳴いて、魔女の手にすり寄った。

「期限は11日間。アナタの願いには充分な時間。11日間を過ぎればアナタはまた此処に戻ってくる。」

「ニャー」

魔女は猫をいとおしそうに見つめて一撫でした。

「行きなさい」

瞬間、猫の体を白い光が覆った。

01・出会い

「……っ」

悠は、何かが体の上に乗っているかのような寝苦しさを感じて目を覚ました。

何かが体の上に乗っている。

また何かがついてきたのか…？

悠は、人には見えないモノを見ることが出来る。

そのせいで迷惑を被ることもしばしばあり、彼はこの特技のようなものに辟易していた。

またそんな類だろうかと見てみると、——そこには、すやすやと安らかな寝息を立てる女の子がいた。

「………は？」

思わず眉を寄せる。

気配からして、そういう類のモノではなかった。ちゃんと生きている。

だが、人間と言って良いのかは分からない。

何故なら、春の上に乗っているモノの頭には、猫の耳らしき物が付いていたからだ。

「………、おい、起きろ」

悠はしばらく考えたが、取りあえずは起こすことにした。

何故ここにいるのか、猫の耳のような物が何故付いているのか。

聞きたい事がある。

それに、体の上で寝られると身動きがとれない。

「起きろ」

寝起きが悪いのか、声をかけるだけでは起きる気配は無かった。起きてもらうため、正体不明のモノの肩に手を置いて揺さぶった。

「起きろっつーの」

「……っう……」

猫の耳がピクリと動いた。

…もしかしてその耳、本気で頭についてんのか？

疑問がもう1つ増えたとき、女の子らしきモノがのっそりと起き上がった。

「んう……」

「起きたか？」

「………え……」

目をこすって眠そうな彼女に声をかけると、耳をピンと立たせてこちらを凝視してきた。

そのまま動かない。

何か固まらせるようなこと言ったけ？と、考えながらも、この隙に観察する。

真っ黒な瞳に、腰くらいまでの長さがある髪。髪の色も黒いけれど、先端の方には黒の中に赤が混じっている。格好はノースリーブの黒のワンピース。そこから覗く腕と脚は細く華奢だった。

これはもう、どこからどう見ても女の子だった。それもそこそこに可愛い。学校にいたらさぞモテたことだろう。

ただし、猫の耳が付いているのを除いたら、の話だが。

「アリヤー!!」

「うおっ!!」

いきなり少女が悠に抱きついてくる。

少女について考え込んでいて、少女のその行動に咄嗟に反応する事ができなかった。

「アリヤ。私だよ、イブキだよ!!」

首に回された腕に力が入る。まるで、無くし物がまたどこかに行くのを恐れているかのように、その腕は少し震えていた。

「……ごめん、話が見えないんだけど。」

「……、やっぱり記憶が無いのは本当だったんだ……。」

アリヤだとかなんだと言い出したかと思うと、今度は記憶が無いとか言い出した。何なんだ一体。

「取り合えず、腕、離してくれる?」

「……………」

するりと腕が外された。

いつの間にか、少女の瞳には涙が溜まっている。

「で、お前は何者?」

「……、私……は……………イブキ……………」

男の一言で、少女は傷ついたような表情になった。堪えきれなくな

ったのか、涙がポロポロと流れる。

少女は悲しんでいた。本当に、少女の主人だった時の記憶がない事に。魔女の言葉を思い出して、その意味を実感する。その時の記憶は、もう少女しか持っていないのだ。

「……あの、アリアの……今の名前は何？」

「……アリアって、もしかして俺の事？」

しかも今のつてどういう意味だ？

てゆーか俺はアリアじゃねえ。

色々気になることはあるが、取り合えず答えておく。

「俺は宮永悠」

「ミヤナガ……ハルカ……？」

「そう。お前の名前は……イブキ、でいいのか？」

こくこくと首を振るイブキ。悠は、イブキの涙が止まるのを待つてから、質問を重ねた。

何故、ここにいるのか。

一体その猫の耳は何なのか。

イブキの正体は何か。

アリアとは誰なのか。

イブキは、春が質問していったことに、涙声になりながらも説明していった。

「最初っから全部話した方が早いかも」

そう前置きがされ、イブキは言葉を紡いでいった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4545z/>

Empty Memory

2011年12月17日12時58分発行